

倫理概念と認知概念の接続について

勝尾彰仁
玉川大学

事実命題と当為命題の共役不可能性を主張したヒュームの法則に象徴されるように、従来倫理概念の当為性にかんしては価値中立的な科学的アプローチによる探索は無効とされ、仮説的データの収集／解析やモデルによるシミュレーション的考察などはこれまでほとんど行われてこなかった。それは、関連分野のマジョリティ研究者の中ではごく当然の了解事項であるかのように、現在も相変わらずタブー視され続けているテーマと言っても良いのではなかろうか。

しかしながら、例えば倫理概念としての「自由」と、認知概念としての「クオリア」は、それぞれの領域で特定の研究成果として提出されてきたモデルやデータが示唆する、当該事象の生成構造としての「再帰性」に注目する時、その類似性の探求を通して「心と社会の学際科学」の発展に貢献すると思われる。なぜなら、(a)固有の生命体であると同時に社会的存在でもある「個人」が価値をおく自由の実現は、彼(女)のマクロ脳システムが行為可塑的な集団環境へ参加適応する際に生成されるクオリアの修正・更新問題に接続可能であること、そして、(b)個人の神経反応傾性の調整による社会的クオリアの向上は、自由社会の発展にとって必須であること、の二点が議論されるべき争点として浮上してくるからだ。

本発表は、先端技術を駆使した記述科学として倫理的神経基盤の解明を標榜するに至った現代の認知神経科学と、厚生経済学の中では比較的最近勃興した理論系領域ながら、分配倫理の規範的分析から社会科学のグランドセオリー確立を目論む社会的選択理論の知見を引きつつ、従来あまり積極的に取り組まれてこなかった両者の対話を促し、新しい知のフィールドとして整備するための“バイパス”開拓作業の中間報告として標記話題を提供するものである。